大乗非仏説と真実教

阿部信幾

序章

宗祖は本典に於いて

大無量寿経　真実之教

と示され、「方便之教」則ち従化入真の法門に簡んで真実の教の語をお使いになられる。この度のテーマとして掲げられている「現代と真実教」の場合は、それとは趣を異にするように思われる。則ちこの度のテーマは現代に於いて、「仏説」を真実と言える根拠は何か？であり、殊に大乗仏教に於いて、大乗経典を真実の教とする根拠は何処にあるか？が重要な問題として存在する。

（本典教巻）註釈版一三四

又、宗祖は

ここをもって経家によりて師釈を披きたるに、「説人の差別を弁ぜば、おおよそ諸経の起説、五種に過ぎず。一つには仏説、二つには聖弟子説、三には天仙説、四つには鬼神説、五つには変化説なり」と。しかれば、四種の説は信用に足らず。この三経はすなわち大聖の自説なり。

（本典化巻本）註釈版二八六

と述べられ、『末燈鈔』には

……この五つの中に、仏説をもちいてかみの四種をたのむべからず候う。この三部経は、釈迦如来の自説にてましますとしるべしとなり。（親鸞聖人御消息）註釈版七五六

と述べられている。則ち経典中に述べられている種々の「説」について、信ずるに足るのは大聖つまり釈尊のお言葉だけであり、仏弟子も含めてそれ以外の説は信ずるに足りないと仰られている。しかし現在、世界の経典研究に於いては、大乗経典は釈尊滅後五百年頃則ちAD一～二世紀頃を初期として、仏弟子の手によって造られたものであることが明らかになってきている。つまり大乗経典は釈尊の言葉を記録したものではなく、滅後五百年頃の仏弟子によって創作されたと言うのが経典研究の世界の定説である。[1] このことを我々はどの様に受けとめたらよいのであろうか？それがこの論文のテーマである。

第一章　『大乗荘厳経論』に於ける大乗非仏説に対する反論

大乗非仏説がいつ頃起きたかについては種々議論されている問題ではあるが、大乗仏教が起こったと同時にそれを批判する論理が生じたと考えるのが妥当であろう。しかしその内容を伺う資料としては、AD五世紀頃に成立したと云われる瑜伽行唯識学派の重要な論書の一つ、『大乗荘厳経論』を挙げたい。その理由は、作者については種々異説があるが、無着菩薩（以下無着と表記）作、世親菩薩（以下世親と表記）釈と言われるところに有る。世親は玄奘の『大唐西域記』真諦訳『婆藪槃豆法師伝』によれば、初め部派仏教最大のセクトである説一切有部の徒であり、部派仏教中最重要の論書と言われる『阿毘達磨倶舎論』を造る等、部派仏教の最高の功労者と言ってもよい存在であった。又、大乗仏教を痛烈に批判したことは伝記に明らかである。しかし後にその菩薩の姿を深く憂いた兄の無着の教化により、自らの過ちを認め、以後大乗を広く宣布したことはあまりにも有名な話である。伝記は兄無着の教化の内容について、詳しく語ってはいない。しかし『大乗荘厳経論』はその第一章則ち「大乗の確立」に於いて、大乗が仏説である八つの理由を挙げて、大乗は仏説に非ずと大乗仏教を誹謗する者に対してその誤りである事を教諭している。ここに大乗を誹謗する者と示されているのは、大乗仏教に転向する以前の世親に他ならず、その批判の理由は菩薩が以前大乗を批判していた理由に他ならない。このことはこの論のサンスクリット訳研究の第一人者である、長尾雅人博士の指摘されるところである。[2] このことから、大乗非仏説の頂点は世親の大乗非仏説であり、それを批判し大乗が仏説であることを論証する論の頂点も『大乗荘厳経論』であると言ってもよいであろう。

さて『大乗荘厳経論』の第一章「大乗の確立」（第一章の区分については二説ある様であるが）に於いて、大乗が仏説である理由が八つ挙げられている（漢訳は七つになっている）が、今回はそのiiとivとviに注目したい。新国訳大蔵経は次の様に指摘している。

大乗の教義が果たして仏説であるかという批判が仏教史上に展開されたとしても、いわば当然としなければならない。しかも、これを予想したかのごとき主張が、『菩薩地』にはなかった形の、本論典の冒頭を固めるのである。それが、「成宗品」第七―二十一頌の箇所であるが、そこにおいて示される、大乗が仏説であるとされる七つの理由を、左に要約して示してみたい。

……乃至……

ii　大乗と声聞乗とは同時に働きうるから。

……乃至……

iv　時代の前後を問わず覚ったものが説いたものは仏説であるから。

……乃至……

vi　大乗によって実践すれば無分別智を得て煩悩を断つという対治の結果があるから。

（新国訳大蔵経　大乗荘厳経論　解題）三六

iiについては梵文和訳の釈（世親）が理解しやすいので次に挙げる。

ii）同じく起こっているのであるからとは（次のような意味である）。大乗はまた声聞乗と同時に起こっていると認められ、後に（起こったの）ではない。したがって、どうしてそれが仏語ではないと知られようか。

（『大乗荘厳経論』第一章の和訳と注解―大乗の確立―自照社出版）五一

つまり釈尊によってすでに説かれていたにも関わらず、あたかも宝石の値打ちを知らないものにとっては宝石が存在しないが如く、まるで大乗が声聞乗の後に成立したかの如く批判する者に対して、大乗は当初から存在し、それが解らないのは大乗を大乗と知る器ではないからであると、大乗は仏説に非ずと批判するものは、機失に於いて大乗の存在が認められないのであるとしている。

又ivについては、

iv）（仏語であることは）成立しているからとは（次のような意味である）。もし他の者が正覚を得てから説いたのだとするならば、それが仏語であることは成立している。誰にせよ正覚を得てからこのように説くのであれば、その彼こそが仏陀に他ならないのである。

（……同右……）五一

則ち声聞乗が正覚を釈尊のみに許し、後はみな阿羅漢果を最上位の覚りとするのに対し、『大乗荘厳経論』に於いては、釈尊以外の者も覚ったものは皆仏陀であり、その者の説いたものは仏説であるというのである。

viについては漢訳の方が理解しやすいので次に挙げる。

第七（筆者注梵文では六）の能治とは、此の法に依るに由りて修行せば無分別智を得、無分別智に由りて能く諸々の煩悩を破す。此の因に由るが故に大乗無しと言うことを得ず。

（新国訳大蔵経　大乗荘厳経論　成宗品　第二）五

則ち大乗は無分別智を拠り所としているのであり、無分別智より説かれた教説の如く修行すれば、自ら無分別智を得、煩悩を対治出来ると説かれている。

以上のことから、『大乗荘厳経論』に於いては、釈尊の在世より大乗は存在し、釈尊の正覚の智慧則ち無分別智を拠り所とした方便則ち対機説法によって覚った者は皆仏陀であり、その仏陀の説いたものは皆仏説と名付けるという結論になる。

第二章　龍樹菩薩の二諦説

瑜伽行唯識学派と中観学派の関係については、まだまだ解明するべき問題が多々存在すると言われているが、この二派の関係について山口　益博士は次のように述べている。

唯識説は、阿毘達磨の識の定義を素材とせる龍樹の因施設の一展開である。

（山口　益著「仏教における無と有との対論」山喜房佛書林）二九

つまり龍樹菩薩（以下龍樹と表記）はダルマ（総ての存在）は相依・相待であり、お互いを依り所として存在しているが故に実体を持たない（無自性・空）と説いた。したがって阿毘達磨が説くところの十二支縁起も、部派が

説く様な時間の流れの上に成立する十二支縁起ではなく、大乗仏教独自の縁起、則ち「これあれば、かれあり。これが生ずることによって、かれが生ずる。これなければ、かれなし。これが滅することによって、かれが滅する。」と云う釈尊の縁起の教説の通り、十二支縁起の一々は他を依り所として存在しているが故に自性を持たないと云う、大乗縁起説に基づいて解釈している。そして「ダルマ」（一切法）はそれを認識する十二支縁起中の「識」に於いて成立し、識は能取（認識する側）と所取（認識される側）に依って成立し、能取・所取は互いに相依・相待なるがゆえに実体を持たないと言う、識に於ける縁起論が唯識説であると指摘されている。又、博士は

無着世親が龍樹提婆を難論したとは未だ聞かざるところであり、又無着世親に至るまで龍樹提婆の学説はその精神のままに保持せられたと云はるる。（……同右……）七二

と述べられているところから、『大乗荘厳経論』の「大乗の確立」則ち大乗を仏説とする理由の淵源は、龍樹の上にこそ求められるべきであるということが云えよう。

龍樹の代表的著述は、言うまでもなく『中論』である。『中論』は先に述べた通り、一切法の無自性・空を論証するところに論の主題があると見るのが一般的であるが、その中で長尾雅人博士は興味深い指摘をされている。

中観学派に於いては、少なくも後世のそれに於いては、この空性より論理の流れ出づること、それが「世俗の建立」と名付けられて、その中心課題となったように見える。彼らは龍樹の『中論』その他の明かすところが、往相的な遮遣に尽きるものではなく、向下的還相的に、論理的世俗的な世界の建立に力が注がれたものと理解し、かつそう主張するのである。勝義・世俗の二諦の構造が中観学派の中心となると考えられるのもその故であり、「世俗の建立」は即ち、二諦の正しき安立にほかならない。（長尾雅人著「中観と唯識」岩波書店）九〇

と中観学派の後期に於いては、二諦の思想がその中心であったことを指摘し、それは後期に限られるものではなく、龍樹の当初より中観学派の中心思想であると、チベットの宗喀巴（ツォンカパ）の『菩提道次第広論』等の説に依って次のように述べられている。

宗喀巴（ツォンカパ）等の西蔵の中観学者は、月称のこの功績を充分に認めながらも、龍樹にかかる向下的な面が無かったとする勝喜の考え方を排除する。即ち龍樹にも世俗の安立があり、むしろそれが最初からの目的なのであって、それはたとえば「中論」第二十四品以下において、明瞭に汲みとられるとなすものである。（……同右……）九一

則ち『中論』はその大半を様々な例を挙げながら、一切法の無自性・空を明かにしている論ではあるが、その目的は二十四品の三偈即ち二諦を説くところにあると示されるのである。次に三偈を挙げれば

第八　二つの真理（二諦）に依存して、もろもろのブッダは法（教え）を説いた〔その二つの真理とは〕世俗の覆われた立場での真理と、究極の立場から見た真理とである。

第九　この二つの真理の区別を知らない人々は、ブッダの教えにおける深遠な真理を理解していないのである。

第十　世俗の表現に依存しないでは、究極の真理を説くことはできない。究極の真理に到達しないならば、ニルバーナを体得することはできない。（中村　元著「現代語訳　大乗仏典　論・他」東京書籍）四

第十偈について『中論』青目釈は次のように述べている。

第十　もし俗諦に依らざれば、第一義を得ず。第一義を得ざれば、則ち涅槃を得ず。第一義は皆言説に因る。言説は是世俗なり。この故にもし世俗に依らざれば、第一義は則ち説くべからず。もし第一義を得ざれば、いかんが涅槃に至ることを得ん。この故に、諸法は無生なりと言えどもしかも二諦あり。

（国訳一切経　中論部）一五八

則ち言説は世俗であり、言説を離れた第一義諦（無自性・空）の真理はそのまま言説の世界則ち世俗に現れて、世俗に生きる我々を第一義諦、即ち究極の真理（涅槃）へと導くと云われるのである。

つまり長尾雅人博士は、第一義諦を覚った仏陀は、必ず言説を以て我々に真理を説き、我々をして仏陀たらしめると云うことを明かにするために、龍樹は『中論』を書かれたと指摘している。

この指摘の上に『中論』撰述の意図を窺うと、すでに成立していた大乗経典を、釈尊の説かれた言葉ではないと云う理由から、仏説に非ずと批判していた部派の説にたいして、大乗は一切法は無自性・空であると覚った無分別智（仏智）を拠り所としているのであり、無分別智が世俗に働いて説かれた教説が大乗経典であり、むしろ釈尊の言葉か言葉でないかに拘泥して、仏説か仏説で無いかの基準としている部派の説こそが、釈尊の精神に反する姿であり、無分別智を拠り所としている大乗こそが、釈尊の精神を継承するものであると云うことを明かにするために、『中論』を書かれたと云う結論になる。則ち仏説か仏説でないかの基準が、無自性・空を覚っているかいないかに置かれるべきであり、釈尊が説いたか説かないかにあるのではない、と云うことを示すことが『中論』撰述の目的であると云うことになると、『中論』こそが大乗経典を仏説であると証明した、大乗非仏説に対する究極の反論であるということになる。正に『中論』の成立、龍樹の出現によって大乗が仏説として確立したのであり、以後無着・世親へとその精神は受け継がれ発展していったと云うことが出来る。

龍樹の出自年代は明かではないが、AD二～三世紀と云われる。その著述から明かな様に、その頃にはすでに初期大乗経典と云われる「般若経」「華厳経」「無量寿経」が成立していた。果たして大乗経典は誰によって製作されたのか？次にこの問題を考えてみたい。

第三章　仏陀による仏陀の誕生

成道後釈尊はバーラナーシー郊外の鹿野苑に於いて、五人の比丘に最初の説法を行ったことはあまりにも有名な話である。この時の様子を経典は次の様に伝える。

その時世尊は、この様な感嘆の言葉を発せられた。

「ああコーンダンニャは悟ったのだ。コーンダンニャは悟ったのだ」

と、それゆえに、尊者コーンダンニャを（さとったコーンダンニャ・阿若僑陳如）と名づけるようになったのである。

（山口　益編「仏教聖典」平楽寺書店）七三

と、この悟りを部派では阿羅漢果と名づけ、釈尊の悟りと同等に見ないのであるが、先に述べた龍樹の二諦説に依れば、第一義の無自性・空を覚られた釈尊は、その仏智より、五人の比丘それぞれの機に応じて説法をされ（対機説法）、五人を皆仏陀たらしめたと云うことになる。則ち最初の説法に於いて五人の仏陀が誕生したことになる。釈尊は悟りをひらいたものが六十一人となった時、弟子たちに次のように告げられる。

その時、世尊は比丘たちに告げられた。「比丘たちよ、わたくしは、神々のものでも人間のものでも、すべての束縛から解脱した。比丘たちよ、遍歴せよ。衆（おお）くの人の利益のために、衆くの人の安楽のために、世間に対する哀れみのために、神々と人間の福祉・利益・安楽のために。二人して一つの道を行くことなかれ。……乃至……〔この世間には〕汚れの少ない人びとがいる。もし〔かれらが〕教法を聞かなければ退歩するが、〔聞いたならば〕法をさとるものとなろう。……乃至……比丘たちよ、わたくしもまた、かのウルヴェーラなるセーナ村へ教法を説くために赴こう。

（……同右……）八九

釈尊も含めて、釈尊の教化によって悟りをひらいた弟子たちは、それぞれ縁にしたがって各地に赴き、人々を教化した、その人々の中には当然悟りをひらいて仏陀となった者もいるはずである。このように釈尊の正覚を淵源として、地域的には各地に仏陀が誕生していったのであり、時代的には釈尊滅後かなり後（正像末の三時説をとるならば、滅後五百年後頃）まで、仏陀は存在していたことになる。ここを正依である『仏説無量寿経』は次のように述べる。

ひと時、仏、崛闍崛山のうちに住したまいき。大比丘の衆、万二千人と倶なりき。一切は大聖にして、神通すでに達せり。その名をば、尊者了本際……。

（仏説無量寿経巻上　註釈版）三

ここに万二千人の大衆は神通力を獲得した「大聖」と呼ばれている。この「大聖」、サンスクリット本は arhat 即ち漢訳の阿羅漢に相当するが、大乗経典であることと六神通を具足していることから、部派の云う阿羅漢果ではなく、仏の尊称の一つ「応供」であり語源上からも「尊敬に値する人」であることが知られる。則ち梵本には仏弟子の名前を列挙して、

これらの人々と、その他の人々とは（当時）一人だけを除いて、すなわち修行の道においてなおなすべきところが残っていたアーナンダを除いて、みな長老であり、偉大な大弟子たちであった。また、マイトレーヤ（弥勒）を先導者とする多くの求道者たち、すぐれた人たち（筆者注　大士）であった。

（浄土三部経〔上〕無量寿経　岩波文庫）一九

と、阿難を除いた総ての人々が、すでにさとりをひらいた仏陀（なすべきことをなし終えたもの）であると告げている。又仏弟子の名前は弟子になった順と云われ、その最初に挙げられている尊者了本際とは、先に引文した「さとったコーンダンニャ」阿若僑陳如に他ならない。

以上のことから、釈尊の成道以来多くの覚った者即ち仏陀が誕生し、仏陀の教化によって仏陀となる道が大乗であり、それは『大乗荘厳経論』が指摘するように、声聞乗の後に成立したものではなく、釈尊の教化当初から存在し、と云うより仏乗は大乗のみであり、そこに声聞乗則ち二乗・三乗が存在するのは機失において存在し、大乗の真実に出遇えない者の上にのみ二乗・三乗があると、仏教は本来一乗であると明かすのが、龍樹・世親の主張する大乗であると云えよう。

第四章　歓喜地の成立

無自性・空をさとった釈尊の智慧は、無上の方便によって無数の仏陀を生み出していった。それは正覚の智慧が伝わっていった歴史であり、仏陀たちは機に応じ時に応じて教化を展開していった。その歴史の上に誕生したのが大乗経典であり、大乗経典は正に仏陀によって説かれた仏説であると云えよう。その根底となっているのは、龍樹・世親の指摘する、無自性・空（第一義諦）をさとった仏智であり、その淵源は云うまでもなく釈尊である。律を定める論書がすべて釈尊滅後数百年を経ているのに、釈尊在世中にその律を定めたと表現しているのと同じように、大乗の仏説はそのほとんどが釈尊が説かれたと云う形式で書かれている。それは云うまでもなく、どの仏の覚りも釈尊の覚りと同等であり、釈尊の出現が無ければ自らの正覚も存在しないと云う、釈尊を師と仰ぎ無我を根底とする仏教独特の表現であると云うことが出来よう。

さて釈尊の説法を聞いて直ちに悟りをひらくものもいれば、そうではないものもいたであろう。ことに在家の信者に於いては、生活そのものが煩悩を離れて成立しないところから、煩悩を対治する智慧を得ても、直ちに悟りをひらいて仏陀となるわけではない。しかし仏説を聞いて信を生ずるということそのことは、第一義諦の仏智より無

漏清浄なる信（仏智）を恵まれることに他ならない。則ち仏説は覚りをひらいて仏陀となる者を生み出すとともに、無漏清浄なる信を獲たものを生み出した。この信を獲た者を歓喜地を証するものと示すことは、龍樹の『十住毘婆娑論』に述べられる通りである。

終　章

仏の正覚によって仏が誕生すると云う論理は、釈尊自らの上にも語られなくてはならない。則ち釈尊を覚らせた仏の存在が問題となる。宗祖は『本典』行巻に於いて、

「一乗海」と云うは、「一乗」は大乗なり、大乗は仏乗なり。一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。……乃至……異の如来ましまさず。異の法身ましまさず。如来はすなわち法身なり。……乃至……大乗は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。

（本典行巻　註釈版）一九五

と、すべての仏は無量寿仏の誓願より生ずると述べられている。則ち無量寿経は大乗の本質（仏によって仏が生ずる）と云う他力の救済を説いた経典であり、正に第一義諦の仏智の全顕であるところに「真実之教」と名づけられる根拠があると示されるのである。仏智に拠って説かれた無量寿経を如実に聞信するところに、正に我らの成仏道があると示されるのが宗祖の教えである。宗祖が世親菩薩が大乗を謗っていた事実を知らず、したがって大乗非仏説の内容も知らず、『大乗荘厳経論』も御読みになっていないとは考えにくい。以上のことから、宗祖は釈尊が説いたと言うことを根拠として「真実」と述べられたのではなく、龍樹・世聖が説き示す大乗の論理に則って、三部経は釈尊の自説であると示されたと窺うことが出来る。ことに無量寿経は大乗仏教の本質を明かす、大乗至極の教であることを示して、「大無量寿経　真実之教」と述べられるところにこそ、宗祖の発揮があると云えよう。

註

（1）旧来の諸派は仏教の正統派を自認し、大乗仏教を無視していた。……乃至……このような態度をとったのは充分に理由のあることである。まず第一に、旧来の諸派は、たとい変容されていたとしても、歴史的人物としてのゴータマの直説の教示に近い聖典を伝えて、伝統的な教理をほぼ忠実に保存している。……乃至……これに反して大乗仏教徒はまったく新たに経典を創作した。

（中村　元著『大乗仏教の思想』春秋社）三四

（2）『「大乗荘厳経論」第一章の和訳と注解―大乗の確率―』（自照社出版）三頁には次のように述べられている。遺稿となった『長尾雅人研究ノート（1）』を拝見すると……乃至……著者（引用者註世親）自身の非を内省する体験がその傷文ないし註釈文の背景にある可能性を指摘する点は、本論書を読み抜かれた先生（引用者註長尾雅人博士）が書き残しておきたいことの一つであったのではなかろうか。